

フランスのゴンクール賞の最終候補作の中から、フランスの高校生 2000 人が審査し、最も優れた作品を「高校生が選ぶゴンクール賞」として選出します。ゴンクール賞よりおもしろい作品を選ぶとも言われています。その中から 2 編。

(1)『碁を打つ女』(ジャン・サ、平岡敦訳、早川書房、2004)

満州事変から日中戦争へむかう時代。男たちが碁を打つために集まってくる満州の千風広場に、学校や家族の重苦しさから逃れるようにやってくる中国人女学生と、上官の命令で抗日分子を見張るため、地元の人間を装いやってきた日本陸軍士官が出会い、碁を打つようになる。

二人はお互いのことを何も知らないが、読者には二人の日頃の生活が、黒白の碁石のように、交互に短い章で語られる。その独白で、お互いの碁の手から、相手の第一印象を語っている。女学生は男の盤上の石を「空を舞う鶴のように軽やかで緻密」と。士官は「鼻っ柱の強さを自制し、精神的な道にむかえばすばらしい打ち手になるだろう」と。

お互いに最後まで知らなかったそれぞれの日常は、戦争に翻弄されていた。女学生は、ある日市政広場に出かけ、抗日連軍と警備隊の銃撃戦にまきこまれ、そこで二人の男子学生に助けられる。親しく付き合うようになるが、彼らは密かに抗日運動をしていた。

日本軍が中国に侵攻する中で、士官も軍服の人間だった。女学生のことを思う時、いつかは打ち砕かなければならないこの国のことも思った。

二人が別々の土地に発つ最後の対局で、女学生は、「あなたは何者なの」と聞く。その答えが分かるのは、最後の章で再会した時だった。士官にも「夜歌」という美しい名前が初めて告げられる。

戦争中、敵味方として出会った男女がたどる結末は、ここでも悲しい。

(2)『フランスの遺言書』(アンドレイ・マキーヌ、星埜守之訳、水声社、2000)

少年の日の一日一日が、作家になることに繋がっている自伝的作品。

ロシア人のぼくは、夏休みごとにシベリアのステップ地方に住むフランス人の祖母の家で過ごした。祖母の話す「美しい時代」のきらびやかな話を聞くのが好きだった。祖母は、トランクに詰まった古新聞や写真をもとに、セーヌ河が氾濫してパリの街が湖になったこと、ロシアの皇帝が仏大統領に招かれてパリを訪問した時の晩餐会の様子などを話してくれた。

しかし、休暇が終わり工業地帯の町に帰ると、学校では先生がニコライ二世の体制を告発したレーニンを讃える。他の子は人生に対してひとつの眼差ししか持っていないのに、自分は二重の視覚を持っていることに戸惑うようになる。「皇帝」という言葉を、ロシア語とフランス語で発音すると全く違う情景が浮かぶ。暴君とシャンデリアの輝きと。

孤独を埋めるため、図書館でフランス関係のものを読みつくした。図書館は蔵書に偏りがあつたが、自然に目は歴史ではなく、文学に向かった。祖母に教わることはもう何もないと祖母に反発したこともあつた。集団主義的な日課に溶け込むこと、みんなと同じ人生を生きること成功したかにみえた日もあつた。受け入れられた級友たちに物語を語る場面がある。・・革命直前、脱出をはかる恋人同士の二人が永遠の別れを迎える朝、雪に埋もれた町のレストランで、熱いお茶を飲んでいる。何年も経って二人は再会

し、その朝の何時間が今までの人生のどんな恋よりも大切だと打ち明けあう・・・。この灰色にくすんだ朝の場面に級友たちは誰も興味を示さない。いちばん大切なことが言葉では言えない。

祖母と過ごした最後の夏休み、祖母のフランス語を聞いていた。シベリアの吹雪や中央アジアの灼けた砂のなかを生き延びてきた祖母のフランス語が、草原のまんなかで今も響いている。その時、祖母の孤独に気づいた。フランス語の話し相手がいない。夏の数週間ぼくたちと過ごす以外は。祖母は話し続ける。言葉にたくさんの匂いや音がしみ込んでいる。厳冬の霧に覆われた光までも。「この言語で文章を書いて表現することができたらどうだろう」

最後の夏休みから13年後、パリにいたぼくに届けられた祖母からの封書と祖母との思い出が「遺言」になった。

シャン・サ、アンドレイ・マキーヌの二人の作家とも、母語ではない言語のフランス語で受賞作を書いた。

(2017.3.6)